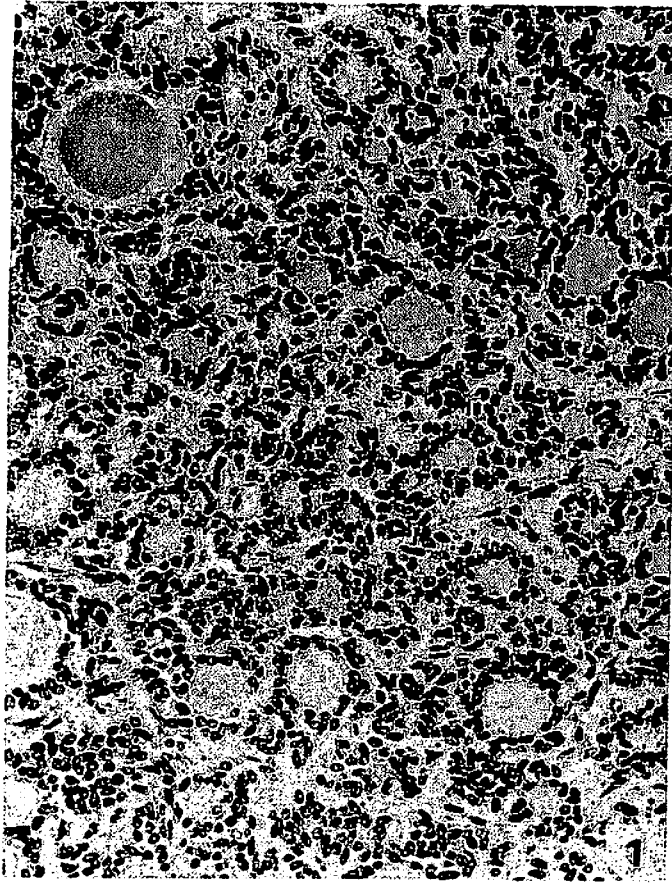


馬の甲状腺

北里大学獣医病理学教室出題

第19回獣医病理学研修会標本No.303



動物：馬(サラブレッド)，雌，35才，イサベリン号
産地：イギリス，繋養地：青森県七戸町，

剖検日：1978年12月16日

臨床：本症例は1978年度，国内最年長馬であるという。
剖検4日前より呼吸困難，衰弱著しくなり起立不能に
進展し，斃死(老衰死)，病歴は殆んどなし。

剖検所見：(1)肺は全域にわたって白黄色を呈し無気肺
性で弾力を増す(2)肝・腎における著明なうっ血と実質の
混濁(3)心重量3.5kg，赤褐色稠で混濁著明、右心房心外
膜下に小指頭面大の不整白色巣形成(4)脾の濾胞萎縮及び
粗大脾材増生(5)右側甲状腺の萎縮及び実質内大豆大白色
結節形成(6)前腸間膜動脈における小児手拳大の寄生虫性
動脈瘤形成(7)慢性化膿性子宮内膜炎。

組織学的所見：肉眼的に指摘された限界明瞭な白色結
節は、組織学的にも薄い結合織性被膜に包まれた結節病
巣で、圧排性の周囲甲状腺組織とは明らかに区別され得
るものである。特徴的病像は大小種々な且つ種々な形状
と濃淡性を示すコロイド濾胞の形成であるが、その病態
は基本的に次の三相から構成されている。即ち(1)コロイ
ドに富む大型濾胞からなるmacrofollicular colloid 領

域(2)円柱状細胞からなる充実性乃至索状増殖領域、かか
る増殖巣にはしばしば管状配列及び腺管構造形成が指摘
される(3)その中間型と解されるmicrofollicular collo
id領域(写真1)である。これら病態の構成細胞には明ら
かな異型性及び核分裂像は指摘されない。しかししばし
ばPASに弱陽性の胞体を備え、Davenport染色で陽性
の細胞が観察された。それは電顕的には多数の分泌顆粒
(Ronald 1977によるtype I, IIに相当)を有し淡明な胞
体として映せられるC-cell と解される細胞である(写
真2)。即ち本病態にはC-cell hyperplasia を伴ってい
ると見做される。

診断：WHOの動物甲状腺腫瘍の分類(Sandersleben
& Hänichen 1974)に従ってfollicular adenoma (濾胞
性腺腫)と診断した。馬における甲状腺腺腫は一般に老令
との関連で報告されている(Huguenin 1927, schotthau
er 1931, Joest 1968)が、(C-cell hyperplasiaを伴って
いることは、その発生に対する今後の検討が残されよう。